

猿は命乞いなんかしない

くろはすみ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

おっちゃんとルーミアが肉を食べる

# 目次

猿は命乞いなんかしない

—  
1



# 猿は命乞いなんかしない

兎を殺した。最近呼吸するのも面倒くさくつて根っこやら木の皮やらで凌いでいたが、やっぱり食いのあるものは良い。それと、マジに動けなくなっちゃまって兎も殺せねえってなつたら後はもう死ぬだけだつてもある。最近、俺は真面目だ。麓の巫女サンの口酸っぱくやれやれと言われていた慰めのお祈りだつて欠かさねえ。……やり方が合つてるかは正直わからねえ。話半分聞いてたのが良くなかつた。今度会つたら聞こうと思つてもいざ会うと忘れるし、そもそもあんまり顔なんか合わさねえ。最後に会つたのは三か月くらい前だつた気がするしよ。

ともあれ、兎一匹殺すのだから、恨まねえでくれよと祈つてやれば安穩無事に生きられるんだと言われりやあ俺だつてそうするさ。ササツと捌いて半分くらいは鍋にして食つちまつて、後の半分は取つとけるように干しといたり、売れるように手入れしたりする。適当な山菜やら香り付けやら、買つてきた野菜なんかブチこんどけばそれだけでご馳走だ。皮は履物にすると調子がいい。尻尾とか足はお守りにして人里で売ちまう。知り合い一人いりやまとめて買い取つて貰えるんで楽だ。

冬。冬はそんな感じだ。熱心なやつは冬眠してる熊なんかをブチ殺しに行く。俺は

面倒くせえからそんなことはしねえ。人を食ったとかで騒ぎになって、しかもそれが俺のシマで、話が回って来た時だけだ。でも俺には山人としての教養なんざねえし、爪弾きモンだった。集まりになんか行ったこともねえし行きたいとも思わねえ。皆は俺と違って努力してるんだ。人と付き合おうって努力だ。それをしねえで好き勝手やってる俺は嫌われるのが当然だ。別に嫌だとも思わねえ。

そもそも山で一人で生きてこうって人間に協調性なんざあるわけねえ。俺から言わせりやアイツらの方がよっぽどちぐはぐだ。俺の知り合いなんて言や、麓の巫女サント、その神社に入り浸ってる連中、森の入り口なんぞに店構えてやがる偏屈の塊みてえな店主、あとはたまに来る。

「お、いい匂いすると思った」

「ああ、来やがった。これだから肉なんざ獲るもんじゃねえんだよ」

「そう邪険にしたものじゃない。ほら、なんと自然薯取ってきた」

「ならいい、入れ」

「ふふ、やった」

たまにくる、宵闇の嬢チャンくらいのモンだ。

\*\*\*

猪を殺した。妙に凶体のデケえやつだった。デケえ肉は面倒くせえ。まあ、代わりに暫く食うに困らねえがよ。俺の個人的な好みで言えば、兎やら鹿よりも、猪だの熊だのデケえ肉は臭いが苦手だ。血抜きが下手なのかも知れん。しかし、本当にバカみてえにデケえ。鉛玉一発で殺せたのは俺が天才なのと、運が半分くらいずつて処かね。こんなもん一人で処理する気にはとてもならねえって思ったんで、嬢チャンをがなり立てて呼びながら作業の準備したら直ぐに駆け付けてきやがった。

「おい、おい、おい、やめときなって、そんな大声。私じやなくて変なのが寄ってきちゃうことだってあるよ」

「俺からすりやお前も変だ、嬢チャン。家に貼ってある札も効かねえような奴で、お前以外の奴が来たらどつちみち終わりだぜ俺あ。だから別に関係ないのさ」

「はあ。相変わらず死に急いでるね。そんで何」

「コイツの毛え筆るんだ、嬢チャン手伝え」

「うは、最低。細腕の女の子にそんなの頼まないで」

「お前全部終わっていい匂いがしてからたかりに来るつもりだったろ。毎度毎度許さねえよ」

「はあーい」

沸かしといたお湯を猪にぶっかけて、二人で毛を筆り始めた。力が強いんで嬢ちゃんの方が早いんで、俺は道具使って引っ掻いて、ガシガシ抜くことにした。

「首落として中身掘り起こして食ったことはあるけどさあ、こうやって毛筆つてると、なんか気持ち悪い毛だね。サラサラじゃないし、すごい細い筒が沢山生えてるみたいでさ」

「首落として中身掘り起こして食ったことある嬢ちゃんのが気持ち悪い」

「んだとお。おっちゃんだつてこんな曰くつきのとこに腰据えてるアンポンタンのくせに」

「曰くつきつたつて、その曰く殆ど嬢ちゃんのことじゃねえか……まあ、確かにここでやってくつて決めた時にはそんな事知らなかったがよ」

毛を筆り終わつたら三枚におろしてバラす。そして食う分やら売る分やらなんやら配分を考える。

「この家だつて元々は私が使つてたんだよ。雨風避けるだけだけど。なんでこんなとこにしようつて思つたの」

「いくつか理由はあるけどよ、まずは立地が悪くなかつた。人里と神社と魔法の森結んで大体真ん中くらいにあるだろ。俺の交友関係なんざそれくらいだからな」

「いや、普通の人間は人里以外に交友関係ないんだけどね」



「うるせえな。もう一つは俺が他の山人共に嫌われてて、ちゃんとしたようなシマだと嫌がらせされちまうのが目に見えてたんで、ケチのついた場所が良かったんだよ」

「じいちゃん、ゴミみたいな人生送ってるんだね」

「そうだな」

「いや冗談だつて。私は良いと思うよ。見た目可愛い女の子の知り合いが沢山いるじゃん」

「俺あもうジジイだし元々インポだ。そんなもんあつたつて仕方ねえんだよ」

「マジでゴミじゃん」

「殺すぞ」

自分で食う、且つ今食いきれない分は塩に漬けといたり、干しておいたり、燻しておいたりする。人手がないんで寝ずに何日もやる。山のだ真ん中で肉を置いてこうつてなりや番も欠かせねえ。これだからデケえのは嫌になる。だからつて、あんな家の近くで見かけてほつたらかして、数日後家に風穴空きましたじゃ笑い話にもならねえ。

「あー、疲れた。もう休まない?」

「駄目だ。サボつてると鳥だの狼だのに集られちまう。サボつてなくても集られるが」

「じいちゃん居ても寄ってくるの?」

「どうもこの辺のは好戦的なのが多い。どいつもこいつも、怖いもんなんざねえつて顔

してやがんだよ」

「つくづく、よく住んでるね」

「近づいてくる奴あ全部ブチ殺してるんで、危ねえって学習した奴らは普段は寄ってこねえよ。飯の匂いがすりゃ話は別ってことだろうな」

「猪なんかほんとはすごく警戒心が強くて人間の匂いがこびりついた場所なんか寄ってこなさそうなイメージあるけど」

「合つてると思うぜ。さつきも言ったが、この連中は頭がイツちまつてんだよ」

聞けば、嬢チャンは最近の食い扶持の半分くらいは俺だと言うんで呆れた。そもそも人間と違って「食う」って事の意味が変わってるもんだからあんまり食わなくても平気なんだとも言っていた。嬢チャンにとつちや動物の肉なんてのは、俺がたまに煙吹かすようなもんで、在っても無くてもどつちでもいいもんなだろう。

\*\*\*

鳥を殺した。飛んでたのを二羽ブチ殺した。さつきとバラして片方は食つちまつた。もう片方は気が向いたんで知り合いの店主にやることにした。ついでにママシ酒の一番年季入った奴も持つていく。たまにこういう土産をやっていると、普段の売りもんに

も色を付けてもらえるってのはまあ、建前で、俺だつてたまには野郎と世間話の一つでも交わしたくなることだつてあるつてだけの話だつた。

「オイ、俺だ」

「ああ、君か。いらつしやい。今日は何をぐい入用かな」

「あー。櫛を作つた。また流しといてくれ。あといつもの酒をくれ」

「準備してくるよ」

本当はこの店は道具屋だ。酒なんざ本当は売つちやいねえし、仲介なんざ専門外だ。だが俺がそこそこ金になる物件だと分かつてるんで、少しくらい融通利かしてくれる。持ちつ持たれつこのこういう関係をいくつか持つていることで、半分道楽みてえなこの店は続いている。と俺は思つてるが本当のところはどうかわからねえ。店のもんをぼけつと見つめてみると、店主と一緒に金髪黒尽くめの嬢チャンが出てきたんで宵闇のかと思つたら、魔法使いの方だつた。

「あ、じいちゃん。久しぶり。まだ生きてたのか」

「あー。まだ生きてるなあ。店主。これ土産だ。鳥肉。処理は済ましてあるから火だけ通しやすく食えるぞ。あとこれはママシ酒」

「ああ、いつもありがとう。魔理沙、今日は食べてくか？」

「折角だし食つてこうかな。私がやるよ。なあじいちゃん、これ何の鳥だ？」

「鳥」

「なーんだあ、じゃあ羽とかくちばしとかあったろ？私はそつちのが欲しかったぜ。血とかさあ」

「次捕まえたらここに持つてきといてやるから、店主から貰え。今回はもう全部棄てちまった」

「わーい」

「お客さん、今回もいい細工だよ。これくらいでどうかな」

「あー、いい、いい。ありがとさん」

「じいちゃんよー、なんかアイヌみたいなことやってんだな」

「あいぬつてのが何かはしらんが、山暮らしのやることなんざどこだって大して変わらんだろ」

「魔理沙、『お店』している間くらいは大人しくしてくれといつも言っているだろ」

「ちえつ。飯の準備してくる」

「店は最近どうだ」

「特に変わらないかな。ぼちぼちだよ。そちらは？」

「あー・・・最近は何ねえかな」

「危ない？」

「猿がうるせえんだ。人が嘯まれたり引つ搔かれたりする」

「それはそれは」

「俺の近場に居る連中はボンクラばっかりで……近場つつつてもそう近くはねえんだが、とにかく木に風穴空けるしか能の無い奴らしか居ねえ。猿なんざ仕留められねえ」

「この辺の山人は『猿を殺したくない』と言う話は良く耳にするけれど」

「殺したくないだあ？」

「うん。銃を向けると手を合わせて拝む、命乞いをするので殺せない、それでも殺すと祟りがあると言つて」

「……本当なら気味悪いな」

「そうだね」

「だが実際にはそんなことはねえと思うぞ。俺は猿に拝まれたことなんざねえし……牙向いて襲い掛かってくるようなのばかりだ。正直おっかなくて仕方ねえ。汚え牙や爪で怪我すりや痛えし治りは悪いし病気になるし。まあ、祟りに見えなくもねえかな。ハハ」

「ハハハ。それで、その猿を仕留める話が回つて来たのかい？」

「いいや。俺は他の山人とはとんと話さねえ。害獣ぶつ殺せなんて話は大体巫女サン經由だよ。ヤツらが猿を殺したくねえなんて言つてるのも知らなかつたくらいだしな」

「なんか話聞いてるとさあ、自分たちは猿殺す腕も無いんで、方便言つて回つてゐるみたい  
に聞こえるな、それ」

「魔理沙。いい加減にしなさい」

「いいつていいつて。俺もそう思う。……まあ実際、難しい奴らだよ。他の畜生ブチ殺すのとは少し違うんだ。危ねえつて思うトコが兎やらとは変わつてんのかもしれねえ  
な」

「なるほど。なんにせよ、君はお得意様だからね。元気でやつてくれないとこの道  
楽も少し厳しくなる。無理などなさらないように」

「ハハ、違いねえ。それじゃあ魔法使いの嬢ちゃんも、またな」

\*\*\*

熊を殺した。冬眠もしねえでそこら中うろろうろして、三人ばかり食い殺したつてんで俺に話が回つて来た。もう、デケえとかそんな尺じや収まらねえんでバラそうなんて気もサラサラ起きねえ。それに、どうも引つかかる。そりや俺に比べりやボククラだと散々言つてきたが、俺のシマからはそこそこ離れた場所のことで話が回つてくるなんざ。そりやおつかねえ。おつかねえが、このくらいならなんとかやつてみせる連

中じゃねえと、今までだつて立ち行かなかつたはずだろう。猿の話も合わせて、妙だ。気持ち悪い。場所が人里近かつたんで、うまそうなたこだけ削いであとは運ばせた。一応は俺に話を直接持つてきた巫女サンに報告すればあとは金が動いて終わりだろう。疲れたし知らねえ顔と言葉交わす元氣も残つてねえ。

熊を煮ていたら嬢チャンが玄関から顔をひよつこりと出した。出てけと言う元氣も、手招きするすくもなく、顎で入つてこいと合図したら黙つて俺の正面に座つた。煮上がつて取り分けて、俺がそれを口に入れようとするそ嬢チャンが言つた。

「人喰つた熊の肉だよ？氣にならないの？」

「……熊が消化したもんは何でも熊の肉になんだよ。それに、そんなモン氣にするやつはここに住まねえ。お前ともつるまねえ」

「そりやそうだ。でも他の人はそうじゃないかもしれないよ。その肉持つて人里に出たんでしよう。誰か一人とでも目が合わなかつた？」

ばかり。と肉を口に運んだ音が妙に大きく感じられた。ああ。あの目だ。こいつは何をしているんだという、異形を見るようなあの目。どうか自分と関わらないでくれ、同じ空気を吸うことすら耐えられないという顔。だから俺はここにいます。何か一つでも変えられたならここにはいない。身寄りもいねえ、ただ食つて寝て生きてきた。自分の年だつて数えてねえ。これしか知らねえ。

「そんな話はな、もう何年も何年も前に終わってんだよ、嬢チャン。例え嬢チャンが俺の何倍生きてたってな。食わねえのか？うめえぞ」

「うまいかー」

どうも今日は口数が少ねえな、と思いつながら鍋を平らげた。俺の機嫌が良くねえのに合わせてただけかも知れんが。次の日巫女サンに熊を殺して人里にやったと報告したら、目を剥くような金額をほれと出された。ちゃんとお祈りはしてるのかと聞かれた。そういやいつの間にかしなくなつてたと思つて謝つたら怒られた。ちゃんとしたやり方を、今度は忘れねえようにしっかりと聞いて約束もした。あの巫女サン、昔はこんなに面倒見良くはなかつた。日が経つ毎に丸くなつてくのを見るのは、ずっと変われずここまで来ちまつた俺への当てつけに思えて気分が悪かつたが、孫みたいに年の離れたガキ相手にそんな対等な感情を自覚できていた訳でもなかつた。

\*\*\*

猿を殺した。三匹殺した。剥いて毛皮にした。こねて肉団子にした。猿を持つて帰る処を別の山人に見られた。あいつは俺のシマで何をしていたんだ。今考えるとぶん殴つて追い出すべきだったかもしれない。いや。あの顔だ。多分もう頼んだつて二度



と来ねえ。まあ、コイツ猿を食うのかなんて無言で語ってやがったのを余計なお世話だとぶん殴る必要はあつたかもしれないねえ。どうにも夜な夜な、鳴き声が近くなっているよな気がして痺れを切らした。そもそも猿つてのは基本的に夜は寝てるハズだろうに鳴き声が聞こえることがおかしい。ともあれ、あの鳴き声は三匹処じゃなかつたと思うが、一週間かけて三匹殺した処で鳴き声はしなくなつた。忌々しい。

「猿つて初めて食べたけど、味の濃い鶏肉つて感じだね」

「やっぱ人間と同じような味なのか？」

「いやあ。もう忘れた。人間なんてずっと食べてない。それに、人食い妖怪にとって、人を食うつてのはチョコレート食べるのなんかとは意味が違う。味がどうこうのレベルじゃないんだよ」

「なんで食わなくなつたんだ？」

「幻想郷のシステムがいつからか組み変わつて、別に食べたくなきや食べなくても生きて行けるようになった。つて言つてもわからないか」

「わかんねえ」

「でも頼んできた人間は食べる」

「そんな奴いんのか」

「いたよ。何人かね」

「へえ。ワケわかんねえな」

嬢チャンは土産に野菜をたつぷり持ってきた。そういうツテがあるのだと言っていた。正直、猿の肉はかなりウマかったし、野菜も最高だった。酒も進むし、あの引つ掻いたような鳴き声も聞こえねえし機嫌が良かった。嬢チャンも楽しそうにしていた。巫女サンと約束した通り、俺は慰めのお祈りも、動物を殺したその場で欠かさなかった。最後に殺した猿は、もう俺がブチ殺した二匹目の猿に覆いかぶさるように、庇うようにして現れた。

俺はその三日後、病に伏せた。

\*\*\*

俺は家のすぐ外の切り株で銃の手入れをするのが毎日の始まりだった。どんなにクソみてえな気分でもそれだけは欠かさなかった。心が落ち着いた。唯一絶対に裏切らない味方を慈しむようなモンだった。俺はその日の朝、体中の体液が無くなるかと思うくらい吐いて、下痢を撒き散らした。悶え苦しんで、苦しい以外に考えることが何一つなくて、銃のことなんざ一瞬も頭を掠めなかった。俺は多分、ここ十年か、微熱すら出したことがねえ。臭え。苦しい。暑い。寒い。痛い。皮膚の内側が全部痒い。クソ

クソクソ。死ぬ。死んじまう。いやもういつそ死んで楽になりてえ。だが手に力が入らねえ。視界も緑と紫でぐにやぐにやになって何もわかりやしねえ。自害も出来ねえ。ダメだ。このまま死ぬまで死ぬほど苦しんで死ぬ。そう思った。

次に自分の意識を感じた時には、若干地獄なくらいにまで回復していて、臭くなかった。顔が胃液にまみれてなかった。嬢チャンと巫女サンが俺の顔を覗き込んだ。

「俺あどうなっちゃったんだ」

嬢ちゃんは日課に出ない俺を不審がって家に侵入したら惨状で、すぐにこれは呪いの類だと気付いて巫女サンを読んでくれたらしい。ありがてえんだが、お前は俺を見てる以外にする事あねえのか。呪いだ。誰が俺に呪いをかけるってんだ。俺あ人に嫌われはしても呪われるようなことはしてねえはずだ。俺が不満タラタラな顔をしてるので、巫女サンが説明を始めた。

「正確に言うとな、誰かが貴方を呪うと決めて呪った訳じゃないのよ。最近山人の間で流行ってた猿の祟りが出回りすぎて、人の心が弱っていった。そこに貴方みたいな刺激的な情報があつて、漂ってた負の感情がたまたま集中した感じね」

「ふうん。じゃああの人たち、自分達の出した嘘を自分達で真に受けて、自分じゃ始末できなかつた害獣を人に始末させて呪いまで押し付けたってわけ？」

「……まあ、私がここで悪い物は全部被っちゃうし、人里の方でも対処はしてもらおうか

ら、少なくともこれからもつと悪くなることはないでしょ。さつきも言ったけど、誰かが直接この人を害そうとした訳じゃない。事故よ事故」

下らねえ。どいつもこいつも下らねえ。俺らが猿に食い殺されたとして、だからつて猿を呪い殺せるとは誰も思わねえハズだ。第一バカバカしくつてそんな気にもならねえハズだ。だがそれが逆となるとコロツと出来ると思ひ込みやがるんだ。何でこう、トンチキなんだ。

「何を考えてるか判りますよ。私にその是非は問えないけれど」

俺にそう言った巫女サンはなんとというか、こう、凜としていた、つて言やいいのか。とにかく、そんな感じだった。俺が巫女サンを対等に見てねえのは、孫みたいになが離れてるからじゃなくて、巫女サンが見てるモンが俺よりずっとデケえつてのを、初めから何となく理解させられていたからかも知れん。

「全部何とかしますので。今は安静に寝てなさい」

次に目が覚めたら誰も居なかった。熊をブチ殺して手に入れた金が半分くらい無くなってた。体は初めから何もなかったみたいになんて軽く、朝だったんで銃の手入れをした。

\*\*\*

鹿を殺した。鹿を殺すつてのは気分が良い。朝露の匂いを感じるように。やつてやっただ、食つてやるぜという気がする。鹿を殺した時は大方、全部自分で食う。好物だ。嬢チャンが攫つちまう分はもう、仕方ねえ。大体、巫女サンなんか恐れ多いのよりもよつほど嬢チャンは孫みたいなモンで、鹿くらい食わしてやるよという気分になつてきている。とはいえ、働かせはする。命の恩人だぞテメーと言つて最近は憚らない。俺の知つたことかよ。お前が助けたくて助けたんだらうが。

「うまい。鹿捌くのがうますぎる。じいちゃん」

「いや、これはこの鹿がうめえ。コイツは当たりだ」

「かー。んまい」

「ああ。んまい」

あれからまたすぐ猿の害獣騒ぎがあつたんで、また何匹か殺して食つた。巫女サンは呆れていたが、別に俺が何かのせいになつた訳じゃねえ。もう調理して食うだけの猿肉を土産に持つてつたらちやつかり食つてやがつたしよ。うまいうまい言つてたよ。

「あのを、嬢チャン」

「はいなんでしよう」

「お前もうここ来るのやめろ」

「えっ!？」

あの時見た、もう死んだ猿を庇う猿は現実だったのかと考える。猿を持ち帰った時に見たあの山人も。そういうや見た事もねえツラだった。覚えてねえだけつても十分あり得るが。最近殺した猿は皆、やっぱり牙向いて必死こいて襲い掛かってくるか、ぴよんぴよん逃げ回るか、どっちかで、手を合わせて拜んでくるなんて猿にはとうとう遭ったことがねえ。わからん。何処かには居るのかもしれないねえ。でも俺は見た事ねえし、もしその話になつたら俺は絶対、猿は命乞いなんかしねえよって言う。

「普通に嫌だ!絶対に来るもんねバーカバーカ」

「そうか。じゃあ俺が死んだらお前俺を食え」

「えっ!？」

それでも俺は巫女サンの言う通り慰めのお祈りはする。わからねえけど、呪いやら祟りやらつてのがあるのは知ってる。猿がどうか、人がどうかは関係なく、あるのは知ってる。だからやる。それで安穩無事に生きられるってんなら俺だってそうする。昔からやられてる事には、大体なんか意味があるもんだ。

「いいけど、なんで?」

「虫とか鳥に食われるよりは嬢チャンのが良い」

有意義な意味かは別にして。